

メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院

一色哲

はじめに—本稿のふたつの視点—

ちょうど日露戦争の最中として、当然のことながら、戦争関係のスライドがわりが多かった。その度に私は、この教室で、同級生たちの拍手と喝采とに自分も調子を合わせるほかなかった。^①

これは、日本留学中の魯迅が体験したいわゆる「幻燈事件」の記述である。魯迅がこの事件を契機に医学を断念して文学による中国変革をめざしたことは、あまりにも有名である。このように、当時既に幻燈は最新のメディアとして様々なものを映し出していた。

もともと、日本には江戸中期から寄席興行を通じて普及していた「写し絵」の伝統があった。そこに、一八七四年、手島精一により米国から洋式幻燈が伝わる。^②その後、幻燈が爆発的に普及するのは、日清・日露戦争を通じてであった。魯迅の「幻燈事件」は幻燈の普及とその目的を明確に表現している。魯迅によると、当時の医学教育の現場では、「微生物の形態」などを実際に示して理解させるために、幻燈が積極的に利用されていたらしい。しかし、この事件では、幻燈に映し出されたのは日本軍による中国人の処刑場面とそれを見物に来た日本人の風景であった。^③こうし

て、幻燈は、ナシヨナリズムと国威発揚のための格好のメディアとなっていたのである。

その後、大阪の寺田清本店や東京の奥商店などの幻燈画・幻燈機を取り扱う大手の店が出現する。そして、文部省は幻燈の教育的機能に目をつけて、幻燈の作製や販売を促進したことも幻燈の普及に拍車をかけた。こうして、この幻燈というメディアは、戦前・戦中期には国威発揚のために積極的に教育の場で用いられ、戦後は一転して民主主義の普及に利用された。

これは、幻燈がメディアとしていかに優秀であったかを示している。幻燈は、ほぼ同時期に普及しはじめた活動写真とは違って、装置が安価で扱いやすかった。また、映されるソフトウエアは、製作が容易であり、種類も教育だけではなく、宗教、衛生、農業、軍事、学術・科学など多岐にわたった。そして、なにより幻燈はそれ自体媒体として脱イデオロギー的だからこそ、さまざまなイデオロギー性を帯びて、幅広い場で広範な階層のひとつに利用されたのであった。こうして、多岐にわたる映像にさまざまな思惑やイデオロギーをこめて時代の空気を作り出していった幻燈は、一九五〇年代に絶頂期を迎えると同時に、スライドやOHP、映画やビデオなどの新しいメディアにとっ

てかわられ、急速に忘れられる。

本稿では、そのような幻燈のメディアとしての働きに注目し、キリスト教界が伝道に幻燈を用いはじめた草創期の一端に触れたいと思う。そして、幻燈が孤児院という社会事業の普及と資金集めに利用されたことが、キリスト教や社会事業を側面から援助する人脈（ネットワーク）を拡大させた過程をみてゆきたいと思う。これが、本稿の視点の第一である。

ところで、キリスト教社会問題研究会の石井十次研究班では、一九九二年以降、『石井十次日誌』（石井記念友愛社発行）（以下、『日誌』と略す）を主たる分析の対象にしてきた。そして、基本的に例会では、発表の担当者は

『日誌』一年分を共通の様式に従ってデータベースに整理し、それをもとに自身の関心により研究発表を重ねてきた。ところが、研究会の場では、『日誌』の史料的な価値とその利用方法についてしばしば疑問が提示され、議論が重ねられてきた。つまり、『日誌』が公開を予期して書かれたか否か、また、『日誌』が原形のまま編纂されたか否かなどである。そのため、研究発表時には、『日誌』の他に、『岡山孤児院新報』（以下『新報』と略す）や石井十次の評伝、岡山孤児院に関するパンフレット類に目配りをしながら、『日誌』の内容を具体的に後付け、幅広く展開させる努力も同時に積み重ねられてきたように思う。このように『日誌』と他の様々な史料を駆使して岡山孤児院の活動の一端を考察するのが、本稿の第二の視点である。

以上ふたつの視点に従って、本稿では、一九〇二年の石井十次と岡山孤児院を対象を^⑦しぼりたい。その際、分析の軸になるのが、岡山孤児院と石井十次が幻燈とプラスバンドを使って行った「音楽幻燈隊」の内容と活動の実際である。

第一章 一九〇二年の石井十次

まず、『日誌』の一九〇二年を一読して気づくことは、石井十次の出張（これを岡山孤児院の関係者は「外部運動」と呼んでいた）の多さである。^⑧この年、岡山近辺に日帰り程度で出かけた例を除く彼の出張の場所と期間は以下の通りである。

- ◎第1回 九州運動… 一日二三日？ 二月一五日 計二四日間
◎今 治 運 動… 三月二二日？ 三月二七日 計 六日間

◎福 山 音 楽 会 … 五月三〇日 … 六月 六日 計 八日間
◎第2回 九州運 動 … 六月一七日 … 九月一六日 計九二日間
◎神 戸・京 都 運 動 … 一〇月 八日 … 一〇月一一日 計 四日間
◎高 知 一 運 動 … 一〇月一八日 … 一〇月三二日 計一四日間
◎山陽運動(広島・呉・尾道) … 一月 三日 … 二月一三日 計四三日間

このように、一九〇二年の一年間で、石井十次は実に百九十日間にわたって全国各地を遊説している。従って、この年の大きな特徴は、こうした長期間にわたる「外部運動」にあるといえる。

次に、その「外部運動」の特徴である。これら都合七回にわたる「外部運動」のすべては、岡山孤児院の孤児で組織されるブラスバンド(音楽隊)の演奏と幻燈会がセットになった「音楽幻燈隊」の形式をとっている。従って、この「外部運動」の特徴は、「音楽幻燈隊」の実態と彼らの長期遠征を可能ならしめた地方組織を解明すること求められると考えられる。

ところで、『日誌』における「音楽隊」と「幻燈(会)」の初出は、それぞれ、一九〇〇年と一八九五年である。¹⁰⁾ また、両者が頻出しはじめるのは一九〇〇年以降である。特に、『日誌』一九〇〇年一月一九日の項には、幻燈隊の収入を孤児院の負債償却金に充てる由とそのために「絵入岡山孤児院」というパンフレット一万冊と「岡山孤児院音楽幻燈会目録」を一〇万枚、「賛助員申込葉書」一万枚を一五〇円の予算で印刷する計画が記されている。

それでは、なぜ一九〇〇年以降に少なくとも『日記』上で「音楽幻燈隊」の活動が活発化するのでしょうか。世紀転換期におけるこのような岡山孤児院と石井十次の活動を考えるとき、それらの活動と「二十世紀大拳伝道」との関係が予測される。¹⁰⁾ つまり、一九〇二年の「音楽幻燈隊」は、一九〇一年からはじまる「大拳伝道」の一環として発想された、いわば「大拳伝道」の地方展開の一形態であるという仮説が成り立ちえよう。たしかに、石井は、「大拳伝

道」以前にも「音楽隊」を率いて全国各地で孤児院の運営資金集めをしていたらしい。しかし、「音楽隊」と「幻燈会」を結びつけ、組織的に「運動」を展開していくことは、「大挙伝道」を通してはじめて可能になったように思う。

第二章 「二十世紀大挙伝道」と幻燈会

—リヴァイヴァル・キャンペーンとメディア—

「二十世紀大挙伝道」は、一九〇〇年の第一〇回日本福音同盟大会で決議され、翌一九〇一年から開始、翌年の九月まで継続された。その「大挙伝道決議案」によると、全国を「若干の伝道区」に分けて、それぞれから委員を選出し、中央からは有力な弁士を派遣することが計画された。また、そのための「運動費金」として五千元を全国から募集することが計画されている。¹⁹⁾

「伝道区」では、その所属教会ごとに準備祈禱会が開かれ、次にそれが諸教会による連合祈禱会へと発展する。そして、「大挙伝道決議案」に約された伝道集会の開催方法を協議する伝道協議会も組織される。こうして開催された伝道集会は、公会堂のような大会場を貸し切って、中央から派遣された有力な弁士の説教を中心に展開し、その合間をぬうように音楽や幻燈を使った余興（後述）が行われ、その場で新たな伝道集会のための募金がなされた。また、この伝道集会では、「伝道区」諸教会の信徒が総動員され、大量のトラクト類が頒布されたのである。

こうして、「大挙伝道」は、都市の住民や知識人を中心に、二万人あまりの新しい求道者を獲得したと評価されている。この超教派で、意図的・人工的に盛り上げられた伝道キャンペーンは、まさに、《伝道集会Ⅱ中央》型リヴァ

イヴァル⁽¹³⁾であった。

この「大挙伝道」の伝道集会では、幻燈がしばしば利用されている。例えば、この間、米国からマーカットという婦人記者が「米国二百十余の新聞社を代表して各地を巡遊」し、「『オペラ、アメガラ』の劇場における基督の一代記」を幻燈として映写したと報告されている⁽¹⁴⁾。また、「第二回慈善旅行の委員たりし人々」が相談会（伝道協議会？）の決議を経て、靈南坂教会で「東京市内貧民窟付近」の人々のために幻燈会が児童教育についての講演会と共に開催され、あわせて女子青年による讚美歌の演奏もなされた⁽¹⁵⁾。

このような音楽の演奏を併用した幻燈会は、「大挙伝道」以前にも主として寄附金獲得のためにすでに頻繁に開催されるようになっていた⁽¹⁶⁾。こうした演奏会や楽団の状況は、日清戦争で大きく変わり、急速に大衆化してゆく。例えば、「出征軍人の歓送迎に吹奏楽が適していることが直接の原因だが、戦争によるナシヨナリズムの高揚や学校唱歌の普及も背景になっていた。こうして民間の吹奏楽団が次々に結成され、彼らはやがて祝賀会や運動会での余興や商店の広告のためにも演奏を行っていくようになる⁽¹⁷⁾」。また、幻燈についても、「はじめに」で触れた魯迅の「幻燈事件」のように日清・日露戦争を経て同様の目的で普及しはじめる。

ところで、通説では、「大挙伝道」に際して福音主義が採用されて、それをきっかけに植村正久と海老名弾正とのあいだで「福音主義論争」が行われたと評価されている。これは、「大挙伝道」のひとつの性格、つまり、福音的靈的性格を示している。しかし、その手法は、幻燈会や音楽隊を使い、大ホールを利用するなど、極めて世俗的であった。「大挙伝道」のもつこのような聖俗の二重構造については稿を改める必要があるが、このような手法が地方のキリスト教界をも活性化させていったことには異論があるまい。

幻燈会、あるいは、音楽隊は、大ホールでの公開にたえることができ、反復・再現が可能だという点で、まさに当

時最新・最良・最強のメディアであったといえる。そして、その両者が結合した「音楽幻燈隊」は、キリスト教伝道にもその威力を遺憾なく發揮し、中央のみならず地方のキリスト教界を活性化してゆく。次章では、その実態を岡山県下の「大挙伝道」を例に述べたい。

第三章 岡山における「二十世紀大挙伝道」

『日誌』での「大挙伝道」の記述は、一九〇一年六月二三日に「本晩より大挙伝道隊開戦」、同二六日に「大挙伝道益々振ふ」、三〇日に「雨を冒して大挙伝道を応援せり」、「本晩にて大挙伝道は終結せり」とわずかである。しかし、それに先立つ六月一七、一八兩日の記述には「ムーカット嬢の演説幻燈会」の記述があり、二〇日には「晩孤児院公会堂に於てムーカット女史の演説幻燈会の感謝慰勞会を開らく」とある。

これは、前章で述べた神戸でも開催された米国婦人記者マークットの一連の演説会の一環であると考えられる。¹⁸つまり、『日誌』には、「大挙伝道」と明示されていない「大挙伝道」関係の記事があることになる。その他、この会の神戸での主催は神戸婦人矯風会であったが、岡山でも婦人会の関与がうかがわれる。¹⁹そして、この兩日、演説と幻燈の間に寄附金の募集が行われ、集められた百円が孤児院に寄附されている。つまり、「大挙伝道」で寄附された金銭は伝道以外にも幅広く用いられたことになる。

このころ、岡山孤児院ではこの年に行われた九州運動のために二カ月にわたって連続祈禱会が開かれて、一種のリヴァイヴァル状態が生まれていた。こうした高揚した状況下で、マークットの演説会を機会に六月二三日に岡山基督教会と孤児院が共同の大挙伝道相談会が開かれる。これが先の同日の『日誌』の記述である。そして、その相談会の

決議に基づいて、「其夜七時より教会に於ては祈禱会を開き、広告掛かりの一群は広告用の大行燈二個と『基督教大挙伝道』と大書したる丈余の大旗二旗を押し立て、孤児院音楽隊の奏樂を以て市中を練り行き、四ツ辻々に於ては廣告的路傍説教をなし八時頃教会に帰りて説教を始²⁰めた。これが、岡山での「大挙伝道」の端緒になった。その後、この動きは経費一五〇円、「広告用ビラ 二千枚、広告用トラクト 二万部、讚美歌 二千部」を動員した「岡山県下七教会秋期大挙伝道」に発展した²¹。

ところで、「大挙伝道」は以上のような派手な伝道集会のみが繰り返されてきたわけではない。翌一九〇二年三月一日の『日誌』の項には「本年は…(略)…岡山県下の聖書伝道会の発会式にあらずや」、「午後四時より操山上に於て『聖書伝道会』の創立祈禱会を開く会するもの二十五人」、「左の諸兄は伝道隊員たることを承諾せられたり(後略)」とある。

この中の「操山上」とは、石井十次がある決意を持ったり、挫けそうになったときよく独りで、あるいは孤児たちと共に祈禱を捧げた神聖な場所で、『日誌』中のキーワードである。その「操山上」で創立祈禱会が行われた「聖書伝道会」とはどんな組織であったのか。この組織は、むこう五年間にわたり岡山県下に福音伝道をするために石井十次等の主唱で組織された。そして、「伝道隊員」が伝道地に集合し、寝食を共にしながら、祈禱をし、求道者への訪問伝道をした。また、溝手文太郎、小松鐵一郎、立石岐といった岡山県内の有力な信徒伝道者がそのために来援したのである²²。そして、六月七日ころにはこの伝道会の組織が固まり、幹事に安部清造、書記に河本乙五郎、会計に丹羽寛夫、石井十次、評議員に立石岐等一六名が任命された²³。そして、このころから『日誌』のなかに石井十次が求道者と共に聖書研究を継続的に続ける記述がしばしばみられるようになる。

以上が岡山県下に於ける「大挙伝道」の一端である。次章では、「大挙伝道」で沸騰する岡山県下のキリスト教界

に突き動かされるように、全国各地に岡山孤児院の存在を示すことになった「岡山孤児院音楽幻燈隊」の実相に少しでも迫りたいと思う。

第四章 岡山孤児院と音楽幻燈会

以下の文章は、「岡山孤児院慈善音楽幻燈隊趣意書」と題されたものである。

岡山孤児院は去る明治二十年四月現院長石井十次氏の創立する所にして。爾来星層を閲すること十五ヶ年。天下無告の孤児を収容すること六百三名。其原籍地は三府三十七県に及び。内既に同院の教科を卒へ進んで中等の学を修むるものは四十名。社会に出でて各種の業務に就けるもの二百余名。而して目下養育の孤児は二百六十名にして。毎月要する所の費金一千二百円以上なりと云ふ。

同院の事業は之れを全国無数の孤児に比べたらんには其の収容せしところ固より少数なりと雖も。若かも世間に未だに此事に思ひ到らざりし時の於て。先づ一身を献けて孤児の伴侶となり其父母に代わりて之れを撫育し天下の人士をして孤独の力にても猶幾白の生霊を救ふに余あることを知らしめたるの功に至つては。実に大なりと云はざるべからず。殊に同院の孤児を教養するや。悉く近世教育学の原則に従ひ。孤児を持つに独立の人をもつてし、其廉耻を励まし。其操守を厳にすること真に勉めたり。是れ唯口腹を養ふのみにあらず。併せて其志を養ふものにして。以て此等の事業の模範にするに足れりと云ふべき歟。

今や可憐なる孤児の一行は当町に來り。幻燈によりて同院の履歴及び実況を示し。普く博愛義侠なる人士に訴ふる所あらんとす。我等石井氏等の拳を美とし同情に堪へず。茲に同志相謀り自ら発起者の任に當り同院のために慈善会を催ふし其所得を挙げて之れを寄贈し永く院児をして仁慈なる各位の温情に浴せしめんとす。希くは一夕の清閑を割きて來会し以て同情相憐むの至情を垂れ給はんことを。

宮崎・茶臼原の石井記念友愛社の石井記念資料館には、岡山孤児院新報社による「岡山孤児院ニ関スル新聞記事集

三十五―三十七年」(実際には一九〇一―〇四年)に、「慈善音楽幻燈隊」に関する各地の諸新聞の記事(一九〇一、57

二年)の切り抜きが保存されている。その切り抜きと筆者が宮崎・福岡で収集した地方新聞、『新報』などのどれにも「趣意書」が掲載されている。ところが、「趣意書」の形式は、どれもほとんど同一である。つまり、現物は未見であるが、孤児院の概観と所要の運営費(月一二〇〇円以上)に続いて、教育理念などを同情を引くかたちで掲載し、音楽・幻燈会の趣旨を述べて、参加を乞うという一定の書式に従った原稿が複写されて、事前に各地の報道機関に配付されているということになる。

また、「趣意書」の末尾には、必ず各地の「発企人」一同の氏名が記載されている。本来はそれらの人物をひとりひとり精査する必要があるが、今回は紙幅の関係もあり、その概観を述べるだけにとどめたい。それらの「発企人」は、警察署長や学校長、そして、企業家などいずれもおそらくその地方の有力者であろう。そして、その中には相当数の非キリスト者も含まれている。

しかし、筆者の関心はそこにはない。筆者が問題にしたいのは以下のことである。つまり、一九〇二年の一年間だけでなく、『新報』に「音楽幻燈会報告」として掲載されている都市の数は、のべ三十四にものぼる(表一参照)。しかし、実際に彼らが訪問する都市はその数よりも多いと思われる。だとすると、それぞれの都市で、時には二十名を越える有力者に「発企人」就任を承諾させるだけのなんらかのしくみが存在していることは容易に想像できる。そのようなメカニズムの解明こそが、筆者の関心である。

このように全国に散らばって各地に常駐し、石井と「音楽幻燈隊」到着の一、二か月前から有力者への「発企人」就任依頼、会場の手配、手伝いの人びとの役割分担、必要な配布物の運搬、幻燈画の取材等々、一切の準備に携わる人物の存在なしには「音楽幻燈会」は開催できないことになる。

『新報』一九〇二年一月号の「謹賀新年」の欄に以下の名前が「外部運動員」として掲載されている。すなわち、

(表1-1) 『岡山孤児院新報』(一九〇二年分)に見る『音楽幻燈会』報告

場所	報告者	月	場所	報告者	月
西宮	入江大九郎(先発隊)	一月	肥後八代	佐久間 武男	八月
尼崎		一月	肥後日奈久	江藤義資(先発員)	
御影		一月	薩摩川内	入江大九郎	八月
横浜市	大西義一(外部運動員)	三月	薩摩加治木	入江大九郎	八月
今治	入江大九郎	四月	鹿児島市	光延義民	九月
伊予波止浜村	佐久間武男	四月	薩摩国分	佐久間武男(先発員)	九月
撰津伊丹	渡辺万吉朗(事務員)	五月	日向都城	柿原政一郎(先発員)	九月
有馬	光延義民	五月	日向高岡	森 重春(先発員)	
撰津三田	入江大九郎	六月	高鍋	柿原政一郎	十月
丹波柏原	光延義民	六月	日向宮崎	森上 信	十月
丹波佐治	光延義民	六月	延岡	入江大九郎(先発員)	十月
丹波篠山	渡辺万吉朗	六月	京都	大西義一(出張員)	十一月
丹波福知山	入江大九郎	六月	高知市	光延義民	十一月
福山	佐藤弘之、渡辺万吉朗	七月	神戸	入江大九郎(先発員)	十一月
熊本市	熊本地方委員	八月	美作津山	佐久間武男(先発員)	十一月
筑後大牟田	入江大九郎	八月			

記述だけでは彼らの度重なる訪問の意味はわからなかったが、こうして傍証を重ねてゆくと以下の事実が浮びあがってくる。彼ら「外部運動員」たちは担当地域に常駐するだけではなく、岡山の石井のところをしばしば訪れた。そし

光延義民、大西義一、林長知、佐藤惣吾、入江大九郎、佐久間武男、渡辺万吉朗、草地磯吉、大島三郎の九名である。この「外部運動員」が上記のさまざまな手配をし、「音楽幻燈会」終了後、石井に対して復命する任を負っていたのであろう。

例えば、光延義民と渡辺万吉朗(関西・中国・四国地方担当)、大西義一(関東担当)の三名は、『新報』紙上などでしばしば転居・連絡先変更の広告を出している。そして、『日誌』によると彼らはしばしば岡山の石井のもとを訪れている。つまり、『日誌』の

て、互いに協議を重ね、ある時には石井に献金や情報などをもたらし、次の「外部運動」に必要な物資を岡山から担当地域に運んだのであろう。その他に、全国の鉄道の駅に設置された赤い「慈善函（現物は「石井記念資料館」に展示）」の管理や集金も彼ら「外部運動員」の役割であったと思われる。そして、彼らの努力により、『新報』の毎号の巻末に掲載されたおびただし数の新しい「賛助員」が集まることになる。⁽²⁶⁾

以上のように周到な準備を重ねて実行に移されてゆく「音楽幻燈隊」の実態について、現在わかる範囲で、最後に述べてみたい。

まず、このような「外部運動」の期間は、石井が岡山を離れているため、当然『日誌』の記述が極端に手薄になっている。その中でもかろうじてわかることは、石井一行が新しい地方に到着したら、直ちに石井は「発企人」に名を連ねている地方有力者を訪問し、出発の前には、どんなに時間がなくても、彼らを再訪し、謝意を述べてから当該地を去っていることである。そして、その記述には、『日誌』にもかかわらず、訪問の模様や感想など一切の感情的表現が記載されていないことは印象的である。

「音楽幻燈会」の詳細を知る『日誌』以外の史料としては、例えば地方新聞をみる方法が考えられる。以下は、「第二回九州運動」の一環として一九〇二年六月二四日に福岡県三池郡大牟田町・三嶋座で、聴衆「二千余名」を集めて行われた「慈善音楽幻燈会」の模様である。⁽²⁷⁾

① 「君が代」吹奏。

② 「発企人」総代（板井真澄）の開会の辞と主旨説明。

③ 石井、音楽隊を整列させ、挨拶、孤児紹介。

④ 「ワーベルデュール」、雪の進軍（軍歌）の演奏。

⑤ 幻燈 その一（三池炭坑、勝立坑、七浦坑、宮ノ原堤、宮ノ浦坑の実景等映写）。

- ⑥ 幻燈 その一（孤児院創設より今日までの沿革、内部の様態等。石井の説明付）。
- ⑦ 休憩中、孤児院の写真版、同院歴史等を場内販売。
- ⑧ 余興 孤児の剣舞、越後獅子の奏楽。
- ⑨ 閉会。

その他、先述の「岡山孤児院ニ関スル新聞記事集」に所載されている諸新聞に散見できる「慈善音楽幻燈会」の内容についても、孤児の吹奏・演舞のプログラムに数種類のものがあるという以外は、ほぼ定式化されていると考えられる。

現在、同志社大学人文科学研究所や岡山市の更井良夫氏宅などには岡山孤児院に関する日本語と英文による写真集や絵ががき、それに、パンフレット類が保存されている。これらは、上記「音楽幻燈会」プログラムの⑦番の「孤児院の写真版、同院歴史等」に当たると思われる。そして、それらが「音楽幻燈会」の場所で売られており、これによる収入も孤児院の運営資金に充てられていた。

ところで、このような会のあり方や資金集めについては、批判がなかったわけではない。以下に挙げるのはその典型であって、同種の批判が現在の研究会の場でもしばしば出されている。

不幸なる孤児を養育せんとするものが社会の同情を得慈善の志を集むるは諒とするも彼の孤児を引率して諸國を巡回し其不幸なる子に音楽を奏せしめ剣舞を演ぜしめ只管世俗に媚び以て寄付金募集の手段となすが如きは甚だ不可なりとなす芸を演ぜしめて得る所の喝采は彼等無邪気なる子に如何なる感覚を与ふるものなるや監督者は之を考究したる後此事をなさしむるなるか²⁸

また、石井自身も『日誌』のなかで抽象的な記述ながら、しばしば「音楽幻燈会」の方法について疑問を持ち、悩みを告白している。それでも、石井は自らの、そして、岡山孤児院の行動を合理化しなければならなかった。このような批判に対する自らの疑問や苦悩を合理化するためには、形式化した有力者への挨拶と定式化されたプログラムとい

った人間の感情をできる限り挟まないような機械的な運営が欠かせないものではなかったか。

おわりに

筆者は、「はじめに」でふたつの視点を掲げた。まず、その第一の視点、つまり、幻燈の歴史的役割について考察することについて述べたい。

幻燈について依るべき先行研究はほとんどない。それは、国立国会図書館編『雑誌記事索引』を見ると明らかである。敗戦直後から幻燈を積極的に利用とする姿勢がみられる。そして、『視聴覚教育研究集録』や『視聴覚教育』、『新しい教材』などといった雑誌が次々創刊された。しかし、一九五〇年代にはいると幻燈の研究は急速に衰退してゆく。

ところで、筆者がもともとキリスト教伝道と幻燈の役割について着目したのは、マイクロフィルム版『近代日本キリスト教新聞集成』（日本図書センター刊）のうち『基督教世界』の目次作成の作業を通してであった。²⁰ 筆者が担当したのは、一九二〇年代前後からであったが、第一次世界大戦後のこのころ、全国至る所で「集注伝道」の名のもとにしばしば幻燈会が開催されていた。つまり、キリスト教界が全国的に伝道活動を展開するときに、幻燈は欠かせないものになっていたのである。

情報やひとびとの重層的なネットワークが社会的な関係を変えてゆく契機となり、これがこれからの歴史分析の主たる関心となるとすれば、吉見俊哉氏が挙げておられるプラスチックや筆者が採り上げてきた幻燈などはその格好の題材となるであろう。それだけ、幻燈は情報メディアとして有効であり、その有効性はネットワークにより増幅され

ている。これが幻燈の歴史的役割であるが、いずれにしても、幻燈に関しては、本稿を契機として、これから研究の蓄積がはじまることを期待したい。

次に、本稿の第二の視点である。

キリスト教社会問題研究会の石井十次研究班は、一九九五年度で第二期の初年を終了する。そして、残る二年間で研究会の成果をかたちにする模索はすでにはじまっている。本稿はこの一環である。

石井研究班のこれまでの蓄積は、『日誌』の分析とそれにもなつて作成された『日誌』のデータベースである。筆者は、本稿を通じて、それらを石井十次・岡山孤児院研究へ生かす可能性を示そうとした。そのための媒介として、「音楽幻燈隊」を設定した。その結果、『日誌』を史料として利用することの限界と可能性の一端がしめされたと思う。

宮崎の石井十次資料館には、幻燈機の現物が展示されている。それは、高さ約三〇センチ、横幅約五〇センチ、奥行き約二〇センチ程度の小型のもので、ガスを光源とする方式のものである。また、その錆びた幻燈機とともに分厚いレンズも保存・展示されている。そのうちのいくつかは破損している。

『日誌』分析は、石井十次、あるいは、岡山孤児院研究の重要な契機となりうる。しかし、同時にその他の史料を併せてそれぞれの課題に取り組まなければ、『日誌』の史料的な価値は著しく損なわれる。そして、その他の史料のなかには、文字史料（例えば『新報』、石井十次評伝類、孤児院紹介パンフレット、書簡類等々）だけではなく、資料館に保存されている写真類や「慈善函」、幻燈機なども含まれなければならない。本稿はその可能性を指摘したに過ぎないが、まずはその一步を踏み出したと思う。

- (1) 魯迅「呐喊 自序」(魯迅「竹内好訳」『魯迅文集 第一巻』筑摩書房、一九七六年に所収)五頁。
- (2) 佐藤俊助「幻燈」(『世界大百科事典 七巻』平凡社、一九六五年)。
- (3) 前掲『魯迅文集』五頁。
- (4) このような経緯に関しては、国立教育研究所付属図書館所蔵の中田俊造文庫等に散見される。
- (5) 例えば、新日本視覚文化協会『幻燈面解説書 民主政治の基 正しい会議のあり方』(同協会、一九四六年)。
- (6) データ整理の共通の様式については計三度の改定を経て、現在は第三版による整理が進んでいる。すなわち、『日誌』の記述を、①日付曜日天気、②行動記録、③内面の記録、④事業の記録、⑤書簡、⑥読書聴講記録、⑦頁の七項目に分類し、データベースソフト「桐」を使ってデータを入力している。なお、作業は、一九九五年一〇月の段階で、一九〇四年分までのデータがほぼ整理されている。
- (7) 本稿は、この共同研究の趣旨に基づいて、筆者が行った同研究会の一九九五年七月二二日の研究発表「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」(『日誌』(一九〇二年)の分析)をもとにしたものである。
- (8) 彼の出張中は、『日誌』の記述が手薄になる。従って、出張の間の彼の詳しい動向は『日誌』以外の史料によらなければならない。
- (9) こうした事項の抽出は、研究会で蓄積された『日誌』の「桐」データからのものである。それによると、「音楽隊」の初出は一九〇〇年一月一九日、「幻燈会」の初出は一八九五年一月六日である。また、データの抽出にあたっては、研究会のメンバーである二井仁美氏を通じて実現された。この場を借りて謝意を表す。
- (10) ちなみに、「大挙伝道」の初出は、一九〇一年六月二三日、それ以降「大挙伝道」の記事は同年七月八日まで三件を数えるに過ぎない。
- (11) 例えば、『東京毎週新誌』(以下「新誌」と略す)一九〇〇年八月一七日に「横須賀に於ける岡山孤児院」という記事があり、石井が横須賀で海軍の将校・夫人を相手に「慈善音楽会」を開いていたことがわかる。
- (12) 『新誌』一九〇〇年五月四日。
- (13) 《伝道集会―中央》型リヴァイヴァルの定義については、拙稿「リヴァイヴァリズムと『自由之天地』創世―高梁基督教教会創立過程の研究―」(『日本文学報』(大阪大学文学部日文学研究室)第二二号、一九九三年三月)、および、拙稿「近代日本

- 社会とリヴァイヴァリズム」(『キリスト教史学』第四九集、一九九五年七月)参照のこと。なお、リチャード・ニーバー
 よると、米国の第二回「大覚醒運動」でも、カリスマ的伝道者による新聞や週刊誌、音楽や劇を使った大規模なリヴァイヴ
 アル・キャンペーンが繰り広げられたというニーバー(柴田史子訳)『アメリカ型キリスト教の社会的起源』(ヨルダン
 社、一九八四年)一七三頁。
- (14) 「神戸に於ける慈善幻燈講演会」(神戸婦人矯風会主催、於神戸神港倶楽部)(『新誌』一九〇一年七月一九日)。なお、こ
 のときには電氣を使った幻燈が映写されていた(『唯該幻燈は生憎神戸電燈会社の機械破損により、電氣を応用して写し出
 し得ざりしため、自然明鮮を欠きたりしは遺憾なりし』同上)。
- (15) 『新誌』一九〇一年八月三十一日。
- (16) 例えば、番町教会の二葉幼稚園で開催された「米國巡遊幻燈會」(『新誌』一九〇〇年三月二日)や戦術の「横須賀に於
 ける岡山孤児院」など(『新誌』同年八月十七日)。
- (17) 吉見俊哉『声』の資本主義―電話・ラジオ・蓄音機の社会史―講談社、一九九五年、九六頁。
- (18) 「マーカット氏は同行者マツカールコン氏と共に去る十五日出発十八七の両夜教会堂に於て演説並にオペラマゴに於けるバ
 ッション、ブレーの幻燈會をせられたる」(『新誌』一九〇一年七月五日)。
- (19) 例えば、「同演説と幻燈の間に婦人會の諸姉會衆の間を奔走して寄附金を集められしに、両夜にて百円余を得たり、雜費は
 婦人會より補助して孤児院へは一百円を寄附することになれり」(同右)など。また、六月二〇日の『日誌』に記載されて
 いる「感謝慰勞會」は婦人會のためである(同右)。
- (20) 同上。
- (21) 同上、一九〇一年八月一六日。
- (22) 『新誌』一九〇二年三月二八日。
- (23) 「聖書伝道會報告會を開き左の諸件を議決す 一、評議員を撰ぶこと(十八人) 二、専務事務員として幹事、會計(式人)
 書記を置くこと 三、一ヶ月の収入を五〇、〇〇〇と定め毎月の出金額を定めたる會員を募集すること 四、伝道隊員八人
 を置くこと」(『日誌』一九〇二年六月七日)。
- (24) 『新誌』同年六月二七日。
- (25) その「記事集」に所載されているのは『越中新聞』、『長岡新聞』、『越佐新聞』、『柏崎新聞』、『高岡新聞』、『富山実業

新聞』、『富山日報』、『大阪毎日新聞』、『大阪朝日新聞』、『新潟新聞』、『中国民報』、『日出新聞』、『神戸又新日報』、『関西新聞』、『日州独立新聞』、『神戸新聞』、『信濃毎日新聞』、『関門新報』、『下之関新聞』、『馬関毎日新聞』、『山陽新報』、『小樽毎日新聞』、『名古屋扶桑新聞』の各新聞である。

(26) この「賛助員」や「特別賛助員」、「地方委員」の役割については今後の課題としたい。

(27) 『福岡日日新聞』一九〇二年六月二六日。なお、『福岡日日新聞』は福岡市立福岡市民図書館に所蔵されているマイクロフィルムを閲覧した。これ以外に、筆者は宮崎県立図書館で『宮崎新報』を閲覧したが、こちらの方は欠号が多数あった。

(28) 『福岡日日新聞』一九〇二年六月二八日。

(29) これらの成果は、同志社大学人文科学研究所監修『キリスト教新聞記事総覧Ⅱ 基督教新聞・基督教世界他』全三巻（日本図書センター、一九九六年予定）に結実する。